

第73回全日本バレーボール高校選手権大会

1月5日、第73回全日本バレーボール高校選手権大会の1回戦で北海道科学大高校を2-0で破り、2回戦に進出しました。

翌日、6日の2回戦では、優勝候補の大阪清風高校と対戦し、健闘しましたが、0-2で惜しくも敗れました。しかし、2セット目など、来年に繋がる良い試合だったと思います。来年を期待しています。

以下、愛媛新聞の1回戦、2回戦の記事を紹介します。

令和3年1月6日(水)付
愛媛新聞 23面
掲載許可番号 d20210106-11

松山工・吉田英弘監督の話 普段から20-20などを想定した練習をしており、終盤の1点が重くなる場面でも選手が慌てず、落ち着いていた。2回戦の清風は優勝候補。胸を借りる気持ちで、思い切ってやりたい。

【評】松山工が重圧のかかるセット終盤に地力を見せ、突き放した。第1セット19-18から山下、白川が連続でスパイクを決め、リードを3点に拡大。次は田窪が相手強打をシャットアウトし、主導権を確立した。第2セットも中盤に3点のビハインドを負ったが、ピンチサーバ―土居の活躍などでひっくり返した。

松山工(男子)見せた実力

「ずっと出たかった大会。緊張するかと思っただが、わくわくが上回った」(白川)。高校バレー最高峰の舞台「春高」を柔しんだ松山工に勝利の女神がほほ笑んだ。

全カプレー楽しみ勝利

1年生がチームに勢い



【男子1回戦 北海道科学大高―松山工】第2セット、松山工の感智(10)がスパイクを決め、6-8とする＝東京体育館

2-0 北海道科学大高下す

だが「楽しんで思い切りプレーできた」。後に現れた好素材」とうならせてみせた。同じ1年生の山下や

主力の2年生白川(10)も発奮。第1、2セットとも終盤までもつれ込む接戦となったが、勝負どころで実力を出し切り、粘る相手を振り切った。白川は「相手の高さにはるまなかつた」と胸を張った。

4大会ぶりの出場でも2回戦を突破。2回戦は強豪の清風(大阪)と対戦する。白川はきょうと同じで思い切りぶつかっていきたい」と意気込んだ。(和泉太)

松山工無念力尽く

男子

高い潜在力爪痕残す

負けて満足できるわけが、スト4の清風に0-2で敗ない。だが、胸を張れる一敗ではなかったか。1、2年主体の松山工は前回、第1セットはいいところ

がなくワンサイド負け。気持ちを切り替え、気合を入れ直した（白川）と第2セットに牙をむいた。序盤は先に走られ、一時は6点のハイハンドを負ったが、気持ちが切れなかった。白川や誠智がブロックアウトを取り、着実に得点を挽回。吉田監督は「落ち着きを取り戻し、強打だけではなく攻撃の選択肢を増やすことができた」。

好ブロックはまだ続く。23-23で檜崎、木村のつづいた壁がセンター攻撃をシャットアウトし、先にセットポイントに到達。檜崎は24-24でも値千金のブロックを披露。ここは速攻はなく、絶対にエース勝負で来ると張り付いていた。勝負勘はさえず、得点源から逆にポイント奪ってみせた。

試合後、吉田監督は「第2セットは取れたセットだった。詰めが甘さと、2年生主体の経験の差が出た」とうなだれたが、同時に爪痕もしっかりと残した戦いぶりだった。

4大会ぶりの出場、6大会ぶりの1回戦突破。2021年度はどんな上昇カーブを描くか。2年生の田窪は「しっかりと練習して、全国ベスト4を目指す」と宣言した。

（和泉大）

【評】松山工は全国トップレベルの相手に屈したものの、最後まで食い下がった。第1セットは高いブロックに押され、わずか13得点。第2セットは松山工もブロックが奮起。檜崎、山下の両センターを中心にチャンスにつなげた。終盤ジュースに持ち込むも最後は力尽きた。試合を通じて、サーブミスが痛かった。

松山工・吉田英弘監督の話 1セット目は気持ちが引いてしまっていたが、2セット目は修正力が付き、前年ベスト4と同等に戦えることが分かった。今後は4強以上を狙い、プレーの精度向上や筋力アップに取り組む。

次は4強以上に

清風に0-2 第2セットは互角



【男子2回戦】松山工―清風【相手の攻撃をブロックする松山工の田窪（2）と山下（8）】

＝東京体育館（春の高校バレー事務局提供）